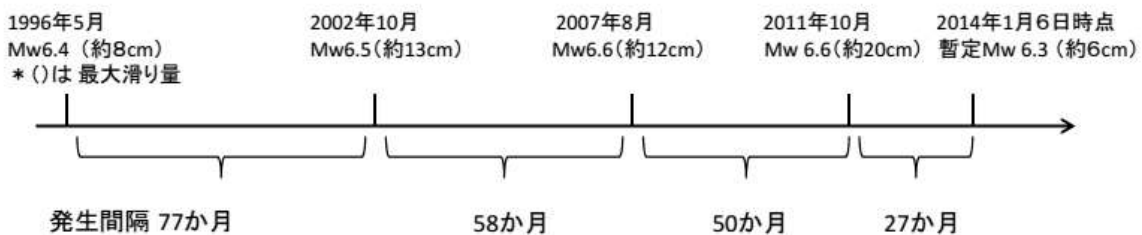


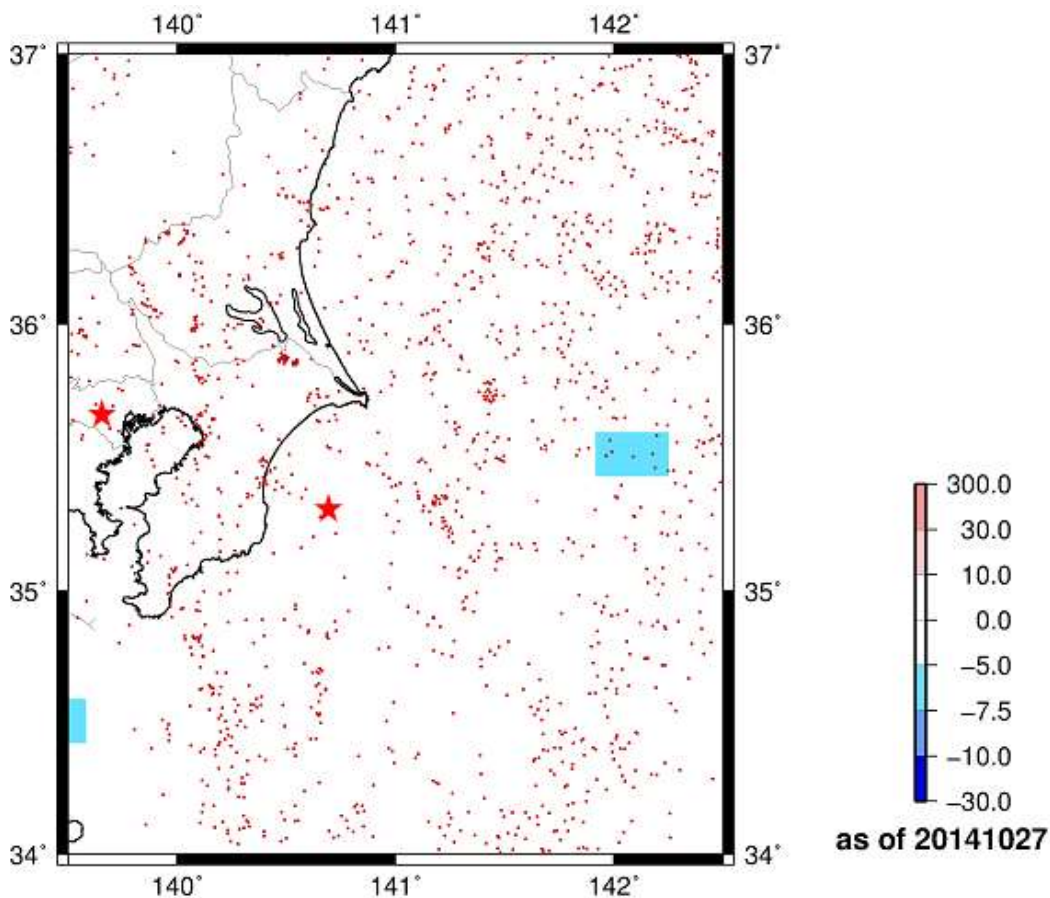
房総半島沖、茨城県沖の状況

今年の1月に房総半島沖でスロースリップと呼ばれる、体には感じないものの、マグニチュード6クラスのゆっくりとしたすべり（地殻変動）が観測されました。このような現象は2014年1月14日と28日のニュースレターで2回連続でお知らせしました。一部再掲しますと、「GPSが実用化される前からの各種データと合わせてみますと、1971年、1977年、1983年、1990年、1996年5月、2002年10月、2007年8月、2011年10月、そして2014年1月となります。」

その間隔は6年-6年-7年-6年-6年-5年-4年-3年となり、最後の2回（2011年10月と今回の2014年1月）は、311の影響を受けたと考えられます。実は、この房総沖でスロースリップが6回発生しますと、過去の例では今度は房総半島沖でM6.5クラスの地震が発生し、若干の被害を出したという事が3回続いています（1912年、1950年、1987年）。前回の1987年の地震は千葉県東方沖の地震と命名されました。現在房総半島沖では同クラスのエネルギーの蓄積がほぼ完了したものと考えています。

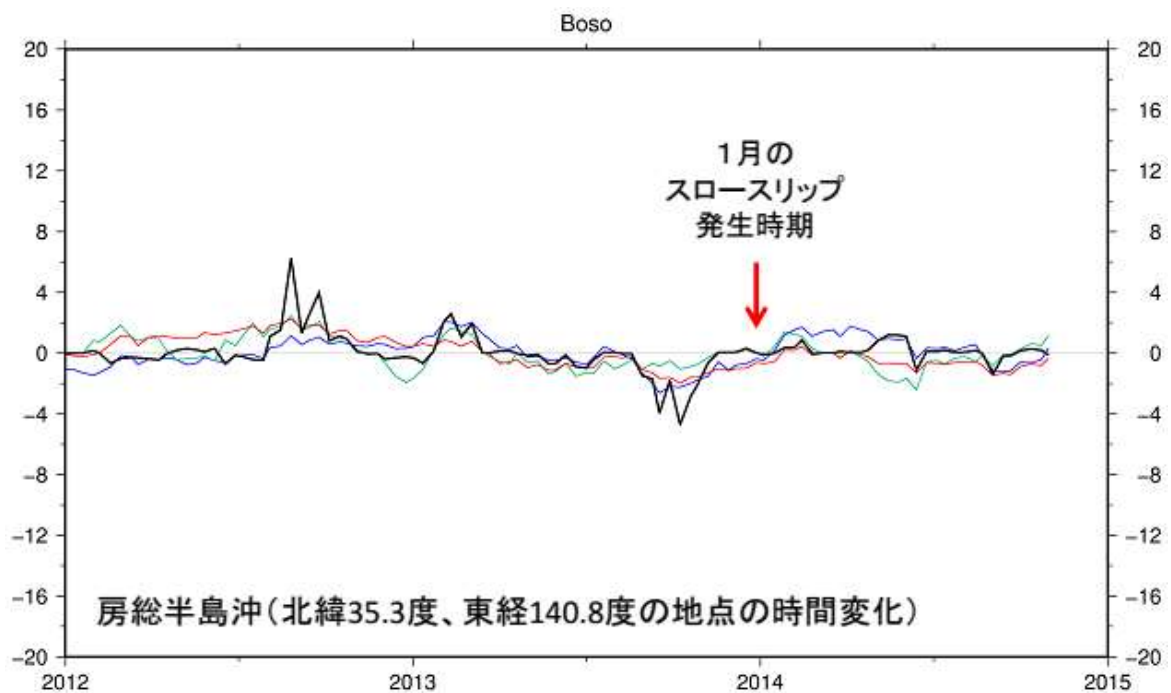
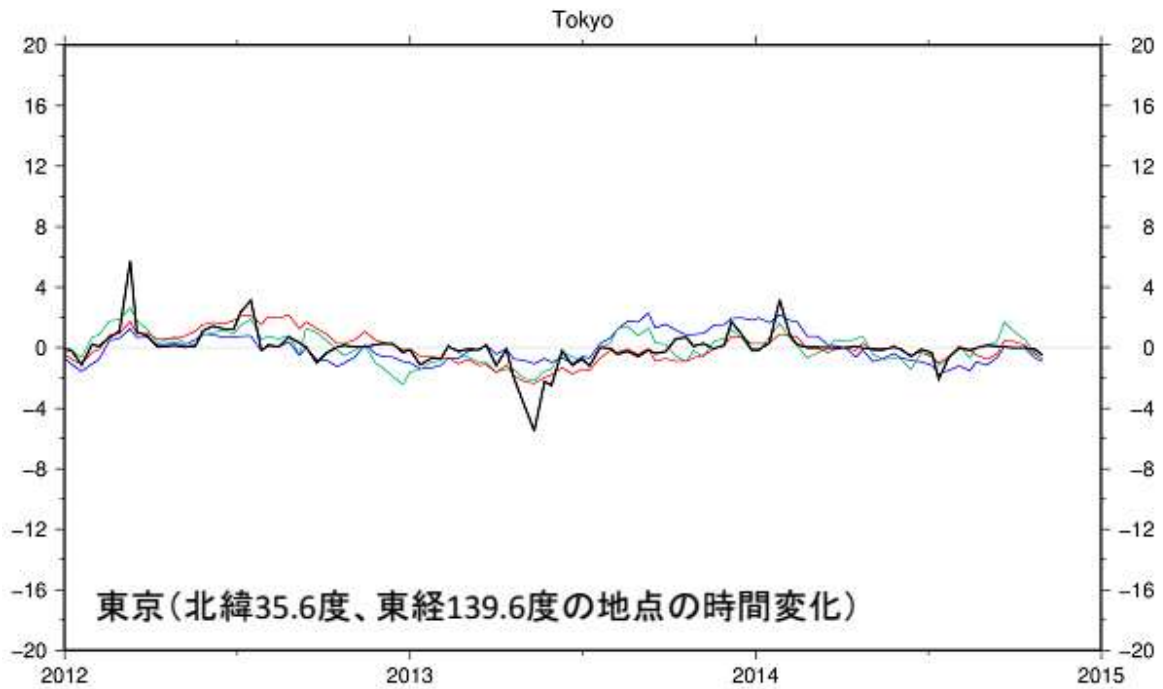


そこで、特に房総半島沖、茨城沖に特化した解析を行ってみました。



解析は3.1以下のデータのみを使い、比較的短期間の地震活動のゆらぎを見ています。図中の小さな赤点は解析に用いた地震です。

その結果、現時点では房総沖、茨城沖には異常は出ていない事が判明しました。また図中の星印の2地点（東京と房総半島沖）でどのような時間変化をしているかを計算してみました。



いずれの地点でもRTMの値はゼロ付近で推移しており、異常は発生しておりません。少なくとも現時点では、房総半島沖の地下天気図からはM6を大きく超える地震発生の可能性は低いと考えています。